

侵入害虫クビアカツヤカミキリからサクラやモモを守る

○山本優一、金子修治、城塚可奈子、磯部武志（食と農の研究部）
[共同研究機関：森林総研、農研機構、日本大学、埼玉県生態系保護協会、
㈱マップクエスト、大日本除虫菊㈱、栃木県、愛知県、和歌山県、徳島県]

1. 背景と目的

大阪府内では2015年にバラ科樹木を加害する侵入害虫クビアカツヤカミキリ（以下、クビアカ）の被害が大阪狭山市において初めて確認された。その後、府内の被害地域は年々拡大し、2020年10月時点で14市町村において被害が確認されている。

クビアカはサクラ、モモ、ウメなど私たちの生活に必要な樹木類に被害を及ぼすことから、文化面や産業面において甚大な影響を与える害虫である。また、現在のところ、国内でクビアカによる被害を抑制する有望な天敵が見当たらないため、何も対策をしなければ被害は拡大し続けると考えられる。そこで、クビアカからサクラやモモ等を守るため、有効な防除技術の開発に取り組むこととした。

2. 事業の内容

クビアカの幼虫及び成虫に有効な防除技術の開発と、それらを組み合わせた防除体系の確立に向けて、主に①～③の試験に取り組んでいる。

①幼虫防除：薬剤樹幹注入試験（サクラのみ適用可）

被害木の内部にいる幼虫に対して、ジノテフラン液剤（ウッドスター®）及びチアメトキサム液剤（アトラック®液剤）の樹幹注入処理による防除効果を検証した。その結果、いずれの薬剤においても、被害木への処理後、幼虫によるフラスの排出が減少することを確認した。この成果によりクビアカ幼虫に対する農薬登録が行われた。

②成虫防除：発生消長調査と薬剤散布時期の検討

大阪府内の成虫防除における最適な薬剤散布時期を検討するために、2019年に羽曳野市内の調査地におけるバラ科樹木上での成虫目撃数の推移をもとに発生消長を調査した。その結果、成虫は6月中旬から7月中旬にかけて野外で発生が多いことが推定され、この期間に薬剤を散布することが成虫防除に有効であることが示唆された。

また、散布薬剤として、サクラではアセタミプリド液剤（マツグリーン液剤2）、メタフルミゾン水和剤（アクセル®フロアブル）、MEP乳剤（スミパイン®乳剤）、モモではアセタミプリド水溶剤（モスピラン®顆粒水溶剤）、シクラニリプロール液剤（テッパン®液剤）等の使用を検討している。

③成虫の拡散防止と産卵阻止：農業用ネットの被覆

被害木へのネット被覆による羽化成虫の拡散防止を目的に、有効なネット目合いについて、成虫の体サイズ（体長・前翅幅など）の分布をもとに検討中である。また、予防対策として、未被害木へのネット被覆による成虫の樹体への産卵阻止を目的に、有効なネット目合いや巻き方について、雌成虫の産卵管サイズ（長さ・幅など）などをもとに検討している。

3. 今後の方向性

①薬剤樹幹注入及び②薬剤散布については、各農薬の残効性を評価し、最適な施用時期や回数を検討する。③農業用ネットの被覆については、引き続き、各防除の目的に応じたネット目合いや巻き方の検討を進める。その上で、クビアカの成虫や幼虫の生態を考慮し、上記①～③の防除技術を組み合わせたクビアカ防除体系を提案する。

また、当所のHPで公開している「クビアカツヤカミキリの被害対策の手引書」において、最新の防除技術を随時、情報提供する予定である。